「おはよう　小川くん、いい天気だね」
「菊原先輩、おはようございますっ！」
菊原明日穂先輩　明るく清楚で学園の人気者
生徒会役員を務めていて先生たちの信頼も厚い
後輩である僕、小川晴人も数多いるファンの中の一人だ
なんとか先輩に近づきたくて、生徒会の末席に入った
「小川くん、生徒会の仕事はもう慣れた？」
「はいっ　菊原先輩にいつも助けてもらってますから」
「ふふ…　今日は定例の生徒会集会だから、また放課後にね」
先輩と話すようになって一つ気づいたこと
頬を赤らめて、少し苦しそうな…　そんな表情の時がある
他の誰も気づいてないようだけど

定例の生徒会集会が終わると、辺りは夕暮れになっていた
部活動をしていた学生たちも帰りはじめ
校内はずいぶん静かだ
他の生徒会役員たちも急ぎ足で部屋から出ていく
「先輩はまだ帰らないんですか？」
「あ、小川君。ちょっと、その、調べものがあって…
鍵は私が閉めるから、先に帰っていいよ」
「はい…　じゃあ、お疲れさまでした」
先輩の言い方に違和感を感じながらも、僕は生徒会室を後にした
鞄を背負い、靴を履いて…　校舎から出る直前、ふと気になった
「菊原先輩、あの表情してたな…」
僕は生徒会室へ戻り――そしてその扉の前で異変に気付いた

「んっ…　うんっ…　はっ…」
菊原先輩の声がかすかに響いている
机に寄りかかって体を揺らして…
具合でも悪くしてるのか？　と思ったが様子が変だ…
「こんな…　はぁっ、だめ、なのに…♥」
ギッ…
じゅわ…
はぁっ
ん…
うん…
ぎゅっ
キシ…
と、先輩が片脚を机に上げて半ばまたがる姿勢になった
スカートも自分でまくり上げているらしい
普段からは想像できない　あられもない格好だ
「あぁぁ…　もっと♥　足りないよぉ…」
太ももから下着まであらわにして、机に股間を擦り付けてる
これって、角オナだよな…!?
キシ…

「あぁ…　はあ…　ぅんんっ…♥」
段々と声が大きく　動きも早くなってきた
机や床にまで先輩の雫が広がっていく
思いもしなかった先輩の姿に、目が離せない…
「んぁあっ　これいい…♥　ここもっと…♥」
ギシッ
ハァ♥
ハッ♥
アは♥
ぷるっ♥
ギシッ
ギッ
ゆさ♥
ギッ
ちゅくッ♥
ぷちゅ♥
擦りつける力が増してきたのか
机のきしむ音がこっちまで聞こえてくる
「も…　ぃく…っ♥　んっ♥　くぅぅんんッ…♥」

「ひうぅぅぅぅウッ…♥♥♥
はあぁっ♥ はぁッ♥ ああぁ♥」
ひときわ甘い声が部屋に響いた…
びくびくと体を震わせている
「はっあ♥ あは♥ はあぁぁ…♥」
…余韻に浸っているのか
しばらくゆらゆらと体を揺らしていたが
再び腰を動かし始めた
「んっ♥ きもちい…♥ も… もう1回…♥」
ズルッ
ゾクッ
ゾクッ
くんッ
プシャアアァ

先輩のいやらしい姿に熱中するあまり
僕は覗いていたドアを動かしてしまった
「だっ誰!?　…小川君!?」
彼女は慌てて振り返る
乱れた服を直す暇もなく硬直してしまった
ビクッ
「菊原先輩っ　僕その…
先輩が具合悪いんじゃないかって心配で…」
「あっあの…　これは違うのっ　その…ッ!?」
そこまで言って彼女の体がぶるっと震えた
足元にまた雫が数滴落ちる…
「～～～～ッ……♥」
とぷっ…♥

「ご…ごめんね、変なとこ見せちゃって…驚いたよね」
「いえ、…良かったら事情を話してくれませんか…？」
…先輩は話してくれた
普段の振舞いの裏に抑えきれない強い性衝動を抱えていること
そしてそれが日々増してきていること…
「…変だよね、こんなの…　自分でも分かってるの…
でも最近は学校でもこんな事しちゃうようになって…」
…確かに驚きだ　先輩のあの表情にこんな秘密があったなんて
「お願い…誰にも言わないで…」
「もちろんっ！　誰にも言いません！」
つい大きな声で返事してしまい、慌てて声を抑える。
「…もし、もしよかったら　僕でその衝動を発散しませんか…？」

先輩と秘蜜の放課後レッスン

――翌日の放課後、僕と先輩の二人は静かな生徒会室にいた

「来てくれてありがとうございます　菊原先輩…」

「小川くんこそ…　変なことに巻きこんじゃってゴメンね」

「謝ることなんかないです　僕、先輩の助けになれて嬉しいんです」

ここは教室棟や部室からも遠く、とても静かだ…

先輩の性衝動の発散を手伝う――　咄嗟にとはいえ

無茶な提案だったと思ったけれど、先輩はそれに応じてくれた

「それじゃあ、レッスンを始めましょうか…？」

――先輩のしたいこと、されたいこと

お互い経験は無いけど、興味のある事をしてみよう

そんな放課後の密会を「レッスン」と呼ぶことにした――

「うん　ちょっと待ってね、準備するから…」

こうして、二人だけの秘密のレッスンが始まった……

下着姿になった先輩の首元に顔を寄せると甘い香りが漂ってくる
彼女の胸と股間に手をやると、下着越しにも熱い体温が伝わってきた…
「力を抜いて身を任せて下さいね…」
「あ…ふぁっ♥　人に触られるのって自分でするのと全然違う…♥」
先輩の熱い息遣いを間近に感じながら手を動かしていく
ぐいっ
すり
すり
ぞくん
ぞくん
ハッ
ハァ
ぶるっ
「次はブラを外しましょうか…」
「うん、分かった…♥　あぁ…おっぱい見られちゃう…♥」

「あぁ…先輩のおっぱい…　ソレを解禁します…」

ブラを外すと先輩の大きな胸が現れる
触れると吸いつくような　滑らかな肌触りだ…

「あぁ♥　おっぱいに触れられるの嬉しい♥」

先輩が体をひくひくと震わせると彼女の香りがさらに濃くなった
手のひらから鼓動が伝わってくる…

「下も触ってみましょうか　ゆっくり撫でますから…」

「んっ…♥　そこも感じちゃう…濡れてきてるのわかる…♥」

ショーツ越しに触り始めてから間もなく
先輩は甘い悲鳴を上げ始めた
「あぁッ♥　嘘っ♥　こんなすぐっ♥　きちゃうぅッ♥♥」
「素直に感じるのもレッスンですから
そのままイってください…!!」
「はあぁああっ♥　でっ出ちゃうぅぅッ…!!」
ぶるんッ♥
ぐリッ♥
ぢゅくッ♥
たぷん♥
イ・クゥ〜ッ♥

「ひぐっ…　あっは…♥　あはぁぁ…♥♥
いっぱいイっちゃった……♥♥♥」
「可愛かったですよ…　沢山出ましたね」
「あ…　ごめんね…　手を濡らしちゃって…♥」
「いいんですよ　それよりまだ出来ますか？
今度は膣内まで直接いじってあげたいんです」
ぶるッ
きゅっ…
ちゅくっ
ぴちゃ
びくんっ
ビクン
とろ…ん
ハッ
ハァッ
ビクッ
くいっ
「膣内まで、直接…？　あぁ…私どうなっちゃうんだろ…♥」
先輩は僕の指示に従って机に上がる…

「これで、いいかな…？」
先輩の両脚が眼前で広げられた　中央の割れ目は
先程の絶頂ですでにトロトロに蕩けている…
「最初は浅く入れていきますね…」
「ああ…　本物のっ　男の子の指の感触…♥
太くて、ごつごつしてる…♥」
ぬぷっ
ちゅぷッ
ひくっ
ひくんっ
ん…♡
は…♡
ひくっ
びくっ
「先輩の膣内…僕の指に
襞がからみついてきますよ…」
「はあっ　はぁ…♥　気持ちいい…
お腹の中、勝手に動いちゃう…♥♥」

「ひっ★」
指を襞にひっかけるように動かすと
先輩がひきつった声を上げた
「痛かったですか？」
「ちがっ　違うのっ…　なんか今っ
凄いの来たのっ♥　それもっと…♥」
びくんっ
ぶるッ
ちゅくっ
キュゥ…
ぐちゅ
じゅぷ
はぁ
はっ
びくっ
がク
「はあぁあっ♥　なかっ熱いよおッ♥
あっ　ああぁっ♥　んあああぁぁぁ♥♥」

「駄目っ♥　らめぇっ♥　全部っ出ちゃうぅぅ♥♥」
先輩は腰をがくがくと震わせながら
ついに潮を噴き上げた
「あぁッ♥　はあぁぁ――ッ♥♥♥」
プシャアアー
がくっ
あっ
ぶるっ
キュッ
キュッ
ぶるるっ
あはァ
がくん
自らの愛液に濡れた先輩を眺めながら
初めての『レッスン』が終わった――

制作　淫税性活

著者　Moris